



Title	フレーベル教育論における〈子ども〉の意味Ⅱ：聖なる空間としてのKindergarten
Author(s)	矢野, 智司
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1986, 12, p. 169-192
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7473
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フレーベル教育論における〈子ども〉の意味Ⅱ

—〈聖なる空間〉としての Kindergarten—

矢 野 智 司

目 次

- I 〈聖なる空間〉としての〈子どもの庭〉
- II 〈遊戯空間〉としての〈子どもの庭〉
- III 〈植物空間〉としての〈子どもの庭〉
- IV 〈祝祭空間〉としての〈子どもの庭〉
- V 結語にかえて

フリーベル教育論における〈子ども〉の意味Ⅱ

—〈聖なる空間〉としての Kindergarten—

F. フリーベル (Friedrich Fröbel 1782-1852) は歴史過程を人間性 (神性) の連続的な展開の過程として捉え、教育による個の発達と人類の進化のダイナミズムを一元的に捉えようとした。すなわち、フリーベルは人間の人間性の展開への主体的で自由な努力を「人間の教育」として捉え、歴史過程を教育の過程におきかえたのである。この過程は二重の意味で教育の過程を意味した。すなわち一方でおとなが子どもを教育し、子どもの人間性の展開を援助していく過程であり、他方では同時に子どもを援助しまじわることを通しておとな自身が自己の人間性を展開していく過程でもあった。ここからフリーベルの実践的関心は、この人間性の実現される子どもとおとなの共同体の創出に向けられた。当初フリーベルは子どもを中心とする家庭のうちに新たな共同体の基盤を構想したが、産業化が進む19世紀のドイツの現実の前には挫折せざるを得なかった。フリーベルは家庭の本質を保持しつつも、戦略的に、おとなと子どもが相互に人間性を実現する場として〈子どもの庭〉(Kindergarten)¹⁾を設立することになる。本論文はこの〈子どもの庭〉の空間としての意味を問うものである。われわれはまず〈子どもの庭〉の成立する過程とそれを支えている理論をみることから出発しよう²⁾。

I 〈聖なる空間〉としての〈子どもの庭〉

「すべてのものの中には一つの永遠法則が安らぎ、作用し、支配している」³⁾。これがフリーベルの形而上学的最も中心思想を表現している言葉である。〈人間の使命〉はこの永遠法則＝神性を認識し実現することである。この神性、神的法則とは、統一から分離、分離から再統一へと向かう運動である。このような人間生活における統一という在り方を、フリーベルは〈生の合一〉と呼んでいる。それゆえに〈人間の使命〉とは、さしあたり〈生の合一〉への努力と言うことができよう。フリーベルは〈生の合一〉という言葉で神と一体となり、自然と調和し、自己の内部に統一をもち、人類の「部分的全体」(Gliedganzes)として生きることが意味していた。しかしこのような言葉を支えているのは、『自伝』にも見られるように、フリーベル自身の「ニルヴァーナ体験」ともいべき合一の体験である⁴⁾。〈生の合一〉とは矛盾と対立をこえて自己の内部に、自然との間に再び調和を得る一つの体験(それ

は神性を実現させる過程とも言い換えうるのだが)に他ならないといえよう。教育の目的はこの〈人間の使命〉の自覚、〈生の合一〉への努力へと子どもを向けさせることにある。

しかし、重要なことは〈生の合一〉が従来解釈されてきたように子どもの教育の目的としてだけあるのではない。〈人間の使命〉はその語が示す通り、子どもにとって目ざすべき目的であるのみならず、おとなにとっても生の課題とするべきものであった。そのときおとなにとって〈人間の使命〉とは具体的には何を意味するのか。ところで、ひとたび〈人間の使命〉という概念に着目してフレーベルを読み返すとき、フレーベルのテキストが二重の機能を有していることに気づく。それは一方で子どもをどのように教育するかという教育論でありながら、他方でおとなに対して新しい生き方、フレーベル自身の言葉でいえば〈人間の使命〉を提示する書でもあるということである。すなわち、フレーベルは一方で教育によって子どもを変様させるとともに、教育するおとなの生の革新をもなさしめることを通して、新しい共同体の建設を企てたのである。それゆえに、フレーベルがおとなにとって子どもがどのような意味を持っていると考えていたかを知ることは〈子どもの庭〉を考える上でも重要なことといえる。では、おとなにとって子どもの意味とは何か、フレーベルの思想を次の三つに分けて考えることができる。まず第一に、子どもは神性を表現しており、無垢性、健全性を保持している存在である。そのため、子どもという存在は、おとなの損われた生のゆがみを写し出す鏡である。また「子ども＝根源的な生」に触れることは、おとなの生を淳化させ活性化させるのである。第二に、子どもは人類の連続的な発展（神性の実現）の後継者である。人間に内在する神性の実現（人間の使命の遂行）は、一世代で終るものではなく世代を交代させながら無限に完成へと向うものである。その意味で〈人間の使命〉から、子どもをもち育てることは重要な課題となる。第三に、子どもを生むことそれ自体が〈生の合一〉であるということ、育てることそれ自体が神性の認識と実現であるということである。なぜなら、永遠なもの、天上的なもの、神的なものが子どもという姿をとって実在するのであるから、子どもをもつとは神性の実現を意味する。子ども（人間）は神性の現われであるから、子どもを育てることは子どもと共に自分の神性を認識し実現することに他ならない。無垢な子どもの中におとなは「失われた樂園」を見い出すのであり、人間のあるべき姿を透視するのである⁹⁾。

おとなにとって〈生の合一〉への努力とは具体的には子どもと共に（あるいは子どものうちに）生きることを意味していたといえよう。このように子どもとおとなが同時におのれの神性を実現していく空間こそ〈家庭〉であるとフレーベルは考えていた。「家庭は——まさに聖なる家庭それ自体として——家庭のなかに生じる三位一体的現象としてつまり生命と光と愛という形態で神的なものを意識的に形成するのである。」⁹⁾ 〈子どもの庭〉成立以前においては家庭が〈生の革新〉の場として明確に位置づけられており、後述のアメリカ移住の計

画においても家庭が共同体の新たな革新の中心であった。そのとき家庭は神性を実現する場として〈聖なる空間〉と考えられた。フレーベルは家庭を〈神の庭〉(Gottesgarten)と呼んでいる。「新鮮で快活に、庭のユリのように、神から与えられた生命に従って、母の保護と父の慎重さに支えられ、神的法則に従って作用する自然に守られ、神の崇高な祝福のもとに、人間よ、神の庭たる家庭において大きく成長せよ」⁷⁾(傍点は筆者)。もちろん〈子どもの庭〉が家庭の延長上に位置する概念であることを考えるとき、〈神の庭〉の〈庭〉は〈子どもの庭〉へと続くものであると見てよい。家庭がもはや生の革新として十分な条件を有しておらず、家庭を革新するための手段が求められたとき〈子どもの庭〉は創設されたといってよい。〈子どもの庭〉こそ子どもとおとなが相互の交渉を通して自己の神性を実現する場として規定されたのである。しかし1836年以前にはまだドイツ国内での家庭を基盤とした革新の可能性を信じていたといえる。

論文『1836年は生の革新を要求する』はドイツ内部での革新を放棄し、アメリカへの移住を提起するものである。私達にとってこの論文が重要なのはフレーベルの思想の核心が〈生の革新〉にあり、しかもその革新のためには〈聖なる空間〉を地上に打ち立てることが必要だという構想を明らかにしたことにある。

「移住するとは、人たるものの純粹の生命を明らかに十分に顕現するために、都合の悪い社会的、風土的、(自然的)なかんずく国家的境遇から脱して、できるだけ都合のよい有利な状態に身を移すことなのである。……だからこの移住によっても家庭や民族とのまた人類および人間性との神聖な関係が純粹なまま残されるだけでなく、それらの神聖な、最も神聖な関係はまさに移住によって根本的に育成され更新されさえるのである。」⁸⁾

ドイツでの教育を核心とする社会革新の道を放棄するとき、フレーベルが〈生の革新〉(Erneuerung des Lebens)のために移住すべき場所は新大陸以外にはなかった。人類は新しい歴史段階に達しており、「生の革新」「生の若返り」「新しい生の春」⁹⁾を迎えようとしている。しかしそれを迎える条件はドイツには欠けている。そのために、これまでの時間を絶ち、新たな時間、新世界の原初の時から生活を始めようとするのである。そのためにはアメリカへの移住の他にはないとフレーベルには思えた。もちろんフレーベルがアメリカを移住先として選んだのは偶然ではなく新大陸に対する当時の「神話的地理学」に基づいていたからに他ならない。ロバート・オーエンを始め様々なユートピア主義者達がアメリカに移住したのも¹⁰⁾、ゲーテのマイスターが最後にアメリカへ旅立ったのも、ただユートピア実現のための現実的可能性をアメリカがもっているという理由だけではなく空間として新大陸が聖性を有していたことによる¹¹⁾。もともと新大陸発見と植民地建設への動因は終末論の刻印を帯びていた。「人々は時いたりなばキリスト教世界は再新され、そして真の再新とは、地上樂園へ

の回復であること、あるいは少なくとも聖なる歴史の再開、聖書が語っているおびただしい出来事の反復であると信じていたのである」¹²⁾ (エリアーデ)、そしてこのような地上楽園の回復の地、旧大陸に対して新たに始められた世界として、新大陸は了解されていたのである。フレーベル自身も先に引用した論文『1836年は生の革新を要求する』の中で、アメリカの本質を「原自然」(Urnatur)として、ヨーロッパの本質である「知識」と対立させ、移住がこの両者を止揚するのだと移住の意義を述べている¹³⁾。シュブランガーが言うようにフレーベルのアメリカとは「永遠的で理念形成的な自然の中にある始源国」¹⁴⁾なのである。では新世界で建設されるべき理想的世界とはいかなるものか、フレーベルはそのイメージを次のように述べている。

「(根源的原民族=ドイツ民族のなさねばならぬことは) 最終的には現世と来世との間の、天上界での生活と地上での生活との間の分裂や深淵や分離の壁が消滅させられ、両方がお互いを内に含みあうものとして、不変的全体や全体生命として把握され、実際に生かされるようにし、かくして地上界が天上界に高められ天上界が地上界にもたらされるようにすることである——久しい間、われわれおよび人類にとって待望されていた平和と喜びの一体となった生命として、ユリのような純粋さをもった生命として、神とひとつになった生命として、人間性のなかにあらわれた神的な生命として。」¹⁵⁾ (カッコ内は筆者)

〈生の革新〉の要諦は、神性を本質とする子どもを中心に家庭を〈生の合一〉(Lebenseinigung)の場として再建すること、そしてこのことを通して共同体を地上の楽園へと転換させること、このためには移住が不可避であることであった。しかしこの新世界への移住は試みられることなく挫折する¹⁶⁾、そしてフレーベルは先の論文で一度は退けた立場にたちもどることになる。すなわちドイツにとどまり教育を通して社会革新を実現すること。フレーベルの関心は家庭の再建という観点から、家庭を再建するための子どもとおとなのための教育施設の創出へと向けられることになる。1837年「自己教授と自己教育とに導く直観教授の施設」設立、1839年「幼児教育指導者講習科」開設、1840年「一般ドイツ子どもの庭」(Allgemeine deutsche Kindergarten)。私達は〈子どもの庭〉という名称に着目するところから始めよう。

フレーベル研究者、プリュファーの叙述に従えば、Kindergartenという言葉は、1840年の春の日、友人たちと共にカイルハウからブランケンブルグへと向う途中、シュタイゲル山から眼下にひろがる美しい景色がまるで花園のように見えその美しさにうたれて思わずフレーベルが「みつけた、その名は Kindergarten でなくてはならない」と叫んだと言われている¹⁷⁾。なぜ Anstalt や Schule という言葉を避けて Garten を採用したかについて、多くの解説書はフレーベルが保母と子どもとの関係を、園丁と植物との関係に置きかえて説明して

きたことを理由にあげている¹⁸⁾。もちろんこのことはまちがいないことであるが¹⁹⁾、この理由では〈子どもの庭〉のもつ保護空間としての側面は理解されても生の革新の拠点としての側面を見失うおそれがある。庭園 (Garten) という言葉は単に植物の植えられた空間、あるいは花園といった意味だけではない。その本質的な意味において庭園は失われた楽園、神の園へのノスタルジーを示すものであり、至福、回帰、救済を象徴する〈聖なる空間〉を意味してきた。それゆえしばしば庭園は地上の天国 (Paradis terrestre)²⁰⁾として考えられてきたのである。このような西欧における庭園創出の歴史を見るとフレーベルが Garten という言葉で表現しようとしたものが単なる保育の空間でないのは明らかのように思える。フレーベル自身次のように言っている。「庭園=楽園したがって、子どもの庭=子どもたちに再び戻され与えられるべき楽園」²¹⁾。最初のところでフレーベルの子どもの思想について述べたことから明らかのように、子どもはおとなにとって回帰すべき「生の原型」であり、理想が実現されるべき未来であった。言いかえれば〈願望時間〉(Wunschzeit)²²⁾であった。たしかに〈子どもの庭〉は地上に現実化された子どもの楽園であり、罪によって損われていない無垢なる子ども、墮落以前の人類が住人である。しかし、その空間は単に子どもの楽園にとどまるものではない。子どもの神性が調和的に実現されていくことと結びつくことによって、おとなが自己の神性に気づき神的法則を自覚的に実現していくような空間として、〈子どもの庭〉は地上の天国化の拠点(社会革新の拠点)として構成されているのである。

以上見てきたようにフレーベルの〈子どもの庭〉とは、おとな/子どもの相互活性化を通して社会の革新を認識し実現していく場、新しい世界、時間の始まる〈聖なる空間〉、神性が認識され実現される〈聖なる空間〉であった。それでは子どもにとって〈子どもの庭〉は具体的にはいかなる意味において神性の認識と実現の場であると考えられたのか、そしてまたおとなはどのようにして子どもとの関係を実現していくのか。

Ⅱ 〈遊戯空間〉としての〈子どもの庭〉

フレーベルにおいて、子どもは環境からの刺激によって反応するといった受動的な存在ではなく、自ら動き世界の意味を積極的に求め、読み取る存在である。子どものこのような意味読解能力を「予感」(Ahnung)²³⁾とよび、直観と区別した。当時の教育学においてはペスタロッチによる認識の基礎能力としての直観という考え方が力をもっていた。ペスタロッチの直観の理論は、たしかに主体の構成的側面を明らかにし、能動的な過程として認識を捉えはしたが、明確な概念へと至る過程を直観の機械的要素的な積み重ねとして把握するにとどまっていた。これにたいしてフレーベルはこのような能力とは別に子どもには世界の全体をおぼろげにはあるが統一的に捉える能力があり、その能力つまり予感を土台にして始めて

直観が意味をもつのだと考えた。「予感なき直観は中味のない英であり、傀儡である」²⁴⁾とフレーベルは言っている。十分に明確ではないが定かでない形で意味を捉えることと直観とは循環しながら認識を深めていくのである。このような世界の意味を総合的に捉えることが予感に可能なのは、世界自身が人間と同様に神的法則に貫ぬかれており、そこに神の思想が隠れているがゆえである。世界は象形文字で書かれた書物であり、世界を知るとは、創造した神の思想を読みとることである。そこには近代的物理空間とは異質の新プラトン主義的意味空間という形而上学が前提とされているといつてよい。マクロコスモスとミクロコスモスとの根源的同質性に基づく、世界理解=自己理解=神的法則の認識という図式から、世界を知るという通路が、自己を知る通路につながっているのである。教育の目標が、神的法則の認識と実現にあるとき、教育の方法は世界認識を媒介にした自己認識を定式化したものとなる。フレーベルの教育方法は、自己活動を通して予感から明確な世界認識=「解釈」へと前進する過程を、段階的に前進させるものであった。それゆえに幼児教育段階では神的法則の予感に重点がおかれており、それを媒介するために、さまざまな遊戯、恩物 (Gabe)、作業が考案されることになる。

これまでのことから理解されるように子どもにとって必要なことは、単に感覚にうったえる空間ではなく、子どもを意味へと導く空間である。子どもの認識能力自体が意味を求めるのであるから、問題はどのように意味ある空間として、子どもの空間を設定するかである。もちろんこのとき意味とは神的法則である。

「……だから全体の全構築物において、外的な構築物においても、意味や意義のないいかなるものも存在してはならない。むしろ高次の生命統一に対する関係が、子どもを客観的事物としてとりまくものにおいてだけでなく、子どもに対して生起するすべてのものにおいても明確にあらわれなければならない。」²⁵⁾

フレーベルがとった方法は彼の世界観から必然的に出てくるものであった。すなわちマクロコスモスとミクロコスモスはお互いに照応関係を有しているのであるから、ミクロコスモスの理解はマクロコスモスの理解と直結している。つまり部分は全体を象徴するのであるから部分を通して全体を予感することが可能である。そのように考えてくると一見無意味と思われていた子どものさまざまな行動が意味を帯びてくることになる。とりわけ遊戯は子どもが世界の法則を予感するためのさまざまなスタイルを含んでいる。そこから遊戯のもつ教育的意義について考察することとなり、教育的な遊戯の設定へと前進していくことになる。フレーベルは当時ドイツで見られる子どもの遊戯を独自の原理に基づき体系化し、そこから子どもを発達させる遊戯を考案することとなる。それゆえに〈子どもの庭〉は遊戯の空間というべきものと考えられたのである。

ところで、このフレーベルの宇宙像は新プラトン主義的な身体一家一宇宙という同質的調

和的宇宙といってよい。そのため身体は宇宙へと通じている重要な象徴である。とりわけ手はフレーベルにおいて人間の内部と世界とを媒介するものと考えられた。

「目が、人間の内部の世界と、より高い精神界との間を媒介するすぐれた機能の持ち主であることは、すでに私たちも知っていて、いままでも述べてきたところですが、手は、人間の内部の世界と、周囲の外部の肉体や事象の世界とを媒介し、さらに空間的現象なかでも肉体的現象と事物現象と精神的思索との間の媒介となるものであるということがいえます」²⁶⁾

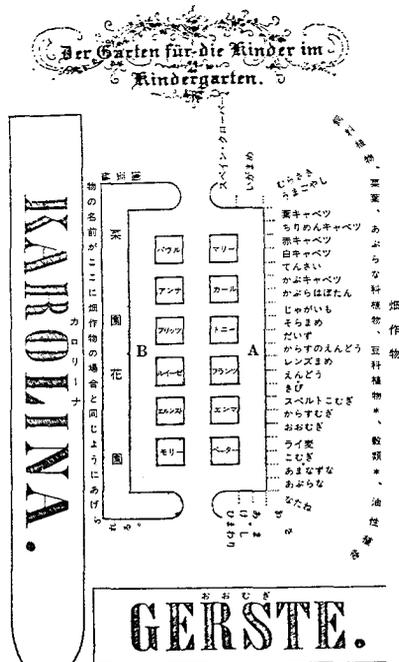
『母の歌と愛撫の歌』には歌と共に多くの手による象徴的な遊戯が登場する、また恩物が手による操作であることは言うまでもない。まだ自分の力ではなほもなしえない幼児にとって、手による空間的分節化は可能な創造的活動であり、最もマイクロコスモスの創出でもある。言いかえれば、手による具体的作業を通して、世界との基本的なかかわりを理解していくことであった。そのとき基本となる世界の関係とは、何よりも合一と分離と再合一であり、全体と部分であった。ミニチュア化された世界は、子どもにとって実際に操作でき基本的な世界の関係を把握することのできる、シュミレーション空間である。マクロコスモスとマイクロコスモスとの根源的照応関係はここでも貫かれており、小さな木片の手による操作や、手をつかっただけの象徴的表現が子どもにより大きな世界の意味を予感させるのである。

たとえば第一恩物は、紐につるされた球である。球は「独立した一つの全体」であり、また「完全なもの」を象徴している。子どもはその球をつかんだり放したりすることによって合一と分離と再合一に導かれるのである²⁷⁾（さらにフレーベルは球をもち放つという行為の中から時間意識、すなわち現在、過去、未来の意識が生ずることを論証するのであるが、ここではこれ以上ふれるゆとりはない）。いずれにしてもプラトン以来しばしば神をそして世界を象徴的に示すものとして考えられてきた球を、子どもの操作可能な恩物として提示することによって、子どもに世界の秩序＝神の法則＝自己の秩序を予感させることを目指したのである。もう一つの例をあげておこう。『母の歌と愛撫の歌』の中の様々な手による遊びの中にある「小さな橋」は橋の形を手で作るものであるが、ここで子どもに体験されることがらは両極の一致なのである²⁸⁾。『母の歌と愛撫の歌』は配列された絵の順序から考えると手の単なる機能的運動から象徴的意味を有する遊戯へと前進させることによって、子どもを家庭内の母親との原空間から市場や教会といった都市市民生活の社会空間へとつれ出すことを目的としているのであるが、そこでの空間的拡大の目的は、世界の基本的関係の予感にある。

〈子どもの庭〉は、まず子どもにとって世界の意味を予感する空間であった。このような空間は、その本質的な意味において〈遊戯空間〉とならねばならなかった。このことはこれまでしばしばさまざまな論者によって指摘されてきたことであった。私達は次章では別の角度から〈子どもの庭〉の思想に光をあてることにしよう。すなわち〈子どもの庭〉の中にある「子どもたちの庭」(Die Gärten der Kinder im Kindergarten)の意味についてである。

Ⅲ 〈植物空間〉としての〈子どもの庭〉

先にも見た通り、〈子どもの庭〉の庭は、たしかに一方では保母と子どもを園丁と植物に對比して考えられたところから発していた。フレーベルはしばしば子どもを語るのに植物を隠喩として使用しているが、その場合三つの用法を区分することができよう。第一にそれは当時の教育論に支配的であった子どもを作り上げるという子ども観に対立するフレーベルの子ども観を示すものであった。フレーベルは植物を隠喩として使用することによって、子どもの自発性と発達への能力を示そうとした。園丁はむりやりに植物（子ども）を大きくしようとはしない。大事なことは植物を外から守り、自らの発展を保証してやることである。（合自然、消極教育の原理）第二の用法は、フレーベルの自然観に基づくものであった。前にも述べたようにフレーベルは自然には神的法則が貫かれていると考えており、そこから自然現象を解説することによって、人間を貫く神的法則を理解することができると思った。それゆえに世界の秘密を告げ知らせるものとして植物を考えており、子どももその類比のうちに理解されており、植物の理解はそのまま人間—子どもの理解をもたらすのである。（神性



図一 個人の庭の周囲には様々な植物が植えられており、植物園としての意味も持っている。

の顕現)第三の用法は人類の新しい芽としての子どもという類比のもとに、子どもを人類の歴史の中で未来の可能性を表現するものとして捉えることであった。(未来の可能性)

ところで、フレーベルの〈子どもの庭〉には、子ども自身が耕す子どもたち自身の庭がある(図1)。ここで子どもたちは自ら耕し、種を撒き、植物を育てるのである。もちろん植物を育てることのうちには生き物を大切にしがくむといった感情を育てるという意図もあるが、それとともに植物の世話を通して神的法則を理解することが意図されているのである⁹⁹⁾。「子どもがこの庭において真の家庭生活、真の市民生活……の一つの像を認めるように、子どもはそれぞれの対象物において、その対象物の生成・成長・凋落を通じて、すなわち、その対象物が一個のものから発展して再び一個のものの表現にたちかえることを通じて、彼自身のよりよい理解と、より正しい把握のための彼自身の一つの像、一つの対型を見出すのである。」フレーベルは続けて、「しかしながら(たとえ単におぼろげな予感にすぎないにしても)早くから自分の発達の過程や自分の自然的ならびに一般的な発達段階に通じるということは、人間にとって計りしれない利益である。』¹⁰⁰⁾と言っている。ここでは、種子が芽を出し、葉を繁らせ、花を開き実をつけやがては枯れていくという植物の生のサイクルを見ることによって、人間の生のサイクルを予感することが述べられている。植物は生のサイクルを象徴するものとして一般に考えられてきた。そこから庭はもともと、生、死、そして再生の循環を最も象徴的に表現している空間、豊饒と死に結びついた空間として考えられてきたが、フレーベルはそこに子どもに生のサイクルの基本構造を予感させる象徴的な場という意味を与えたのである。

「自然そのものは、いわば慈母のように、人間を導いて、人間に対して自然の宝、自然の富、あらゆる多様性をひとつに全体に結合する自然の内面的な合法性を、いや自然の中に作用する力の生命もしくは統一をらしめるようにするのである。もしわれわれが不活発に、またわれわれの感覚を用いないで自然を凝視したりするようなことさえしなければ、というよりはむしろわれわれの眼を用い、われわれ内部の心を開こうと努力するならば、自然はその内部的な本質を人間にしらしめ、明らかならしめるようにするのである。』¹⁰¹⁾

フレーベルにおいて自然を視ることは単に対象として自然を客体化し観察することではなく、自然によって表現された神的法則の象形文字を凝視し解読すること=内部を反省することであった。自然を視ることは自己自身を省り見ることであった。そのとき木や草花は自然という象形文字の代表として取り上げられるのである。このような認識の在り様は当時のロマン主義者たちにとってなじみのものであった。ノヴァーリスは「花は私たちの精神の秘密の象徴である』¹⁰²⁾と言っている。汎神論を基盤におくこのような考え方はフレーベルにも共通するものであり、フレーベル自身の生活史の中でもしばしば植物との出会いの重要性が指摘される。とりわけ重要なのは『自伝』の中で、フレーベルの最初の自然との合一体験を記

述しているところである³³⁾ (この体験が後に〈生の合一〉として概念化される)。それはフレーベルが少年のころ、人間が男と女に分かれているということに「深い苦痛と悲哀」とを感じていたところ、榛の花にも両性があることを兄から教えてもらい満足したというものである。このとりとめもない話の背景には、幼くして母を失い、継母や父と不和のまま孤独に生きているフレーベル少年の姿を見なくてはならない。彼は継母や父との乖離を、自然(植物)との根源的同一性という体験を通して克服しようとしているのである。この自然と人間との同質性の体験は、彼の形而上学を支えるものとなっている。「……自然、わけても植物界、特に樹木の世界は最も高い精神的な関係において人間生活そのものの鏡であり、否な象徴である」³⁴⁾。

また、この子どもたちの庭にはフレーベル特有のアナロジーが付与されていることを見逃してはならない。すなわち、エデンの園では神がアダムとイブを養育するように、そして〈神の庭〉たる家庭や〈子どもの庭〉では親やおとなが子どもを育てるように、子どもたちの庭では子どもが植物を育てるのである。園丁と植物の関係がこの三つの庭園で貫徹されている。おとなは子どもを育てることによって、子どもは植物を育てることによって、神の行為にならい神性を自覚し実現するという〈人間の使命〉を遂行させることができるとフレーベルは考えたのである。

(園丁) — (植物)	庭園
神 — 人間 (アダムとイブ)	エデンの園
人間 (おとな) — 子ども	家庭・子どもの庭
子ども — 植物	子どもたちの庭

子どもたちの庭の意味はこれにつぎるものではない。図1からも明らかなように共同の庭と個人の庭が分けられており、共同の庭が個人の庭を取り囲んでいる。「ここでは子どもたちの庭やそれぞれの小花壇は、ちょうど特殊的なものがつねに一般的なものにおいて保護されて安住し、一般的なもの特殊的なものを保護しながら取り囲むように共同の庭によって取り囲まれねばならない。」³⁵⁾とフレーベルが述べているように、このような空間的配置によって、個別と一般というものの関係を理解させようとするのである。庭はその製作の歴史の始めより秩序化されたミクロコスモスの創造として、その空間的分割には必ず庭園作者のコスモロジーが反映してきたといつてよい。フレーベルは〈子どもの庭〉を、子どもが世界との関係を予感することのできる象徴的空間として構成しているのである。

そのことはまた共同体としての〈子どもの庭〉をどのように考えていたのかをみるとき明らかになるように思える。フレーベルはハーゲンへの手紙の中で〈子どもの庭〉の共同体的特質について次のように述べている。「全般的な〈子どもの庭〉の特質によって、あらゆる

子どもが、全体、この場合は子どもの国家、つまり〈子どもの庭〉の一員としてあることだけでなく、同時に、その全体の発展と開花に対して義務を負い要請をうけいれるのを感じる。なぜなら、子どもたちは、その全体によってのみ自分の自由を守られるのであるからである。』⁸⁶⁾「子どもの国家」という言葉の内に、〈子どもの庭〉があるべき共同体の祖型を表現しているといえよう。子どもは全体の一員として全体の「発展と開花」に義務を負い、他方で自由が約束されるのである。自己を共同体に譲り渡すことによって自由を獲得するというルソー的共同体論が表明されている。フレーベルの共同体論⁸⁷⁾は十分に展開されているとはいいがたいが、個と全体との弁証法的関係を基礎にした「部分的全体」という万物の在り様を規定する原理に基づいていた。全体と個の関係はフレーベルの教育論の中核的問題であるが、「部分的全体」という思想はカイルハウ論文集以来の基本的な把握構造であり、初期より一貫しているといえる。そのため「部分的全体」を自覚させることは教育の目標であり、



図-2 ゆりの花と子どもという組み合わせからロマン主義画家ルンゲを思いおこさせるこの絵は、また数学的明晰さと透明感に満ちている。上部中央に描かれた手は左手はゆりのつぼみ、右手はじょうろで水をやるしぐさを示している。

〈子どもの庭〉の空間的配置もまたこの目標に対応している（また後に見る通り子どもたちが手を取りあって輪を作るという体験がこのために利用されるのである）。このような共同生活（作業）の場としての〈子どもの庭〉は単なる社会のミニチュアではなく、あるべき理想的共同生活、失われた楽園の回復された空間として構想されていたといえよう。

建築家としての修業をしていたフレーベルが〈子どもの庭〉の建築プランを残していないのは奇異な印象を受けるが『母の歌と愛撫の歌』の絵⁸⁸⁾などから子どもたちの庭について推量することができよう。フレーベルの子どもによる植物の世話は『母の歌と愛撫の歌』の中に見ることができる（図2）。もちろんこの絵はフレーベルが自身で〈子どもの庭〉を描いたものではないが、子どもと庭、〈子どもの庭〉をフレーベルがどのようなイメージで捉えていたかを読み取ることができる。中央の円筒形と半円球形を結びつけた、幾何学的に明断な集中式プランの建て物は、このマイクロコスモスの中心、世界軸であり、その円形の建て物



図-3 「ノスタルジーにふける意識は庭園で夢想する。そこでは牧歌が、姿を隠しつつ、失われた和解への哀惜をとどめる。」（スタロパンスキー）庭園へのノスタルジーは、ロマン主義的な子どものイメージと結合し〈子どもの庭〉を形づくっている。庭園は庇護されている、しかし隠垣は世界から庭園を完全に閉ざすものではない。

を中心に同心円の宇宙を形づくっているようにイメージされている。その建て物の背景には教会の屋根と十字架が見えており、この建て物の聖性を明示している。図3は、「庭の門」という題名がついている。図2と同様、中央に円形の泉があり、そのまわりを植物が囲んでいる。「花をいじめるものがないように門をしっかりしめましょう」³⁹⁾と歌が記されている(もちろん、ここで門が閉じられているのは庭園空間のもつ庇護性の隠喩である)。生命の泉とそれを取り囲む生命の木のもとで、子どもの生は保護されていることを示している。新プラトン主義を思想的背景とするところの同心円的に拡大していく空間、その空間の内部での「植物—子ども—園丁」の存在、これがフレーベルの〈子どもの庭〉であり、この空間がフレーベルの考える理想的な世界であった。「フレーベルは〈子どもの庭〉の中に、失われた楽園を取りもどしたのである」⁴⁰⁾とフレーベルの協力者、ミッテンドルフが述べる時、それはまったく正しい評価であった。

私たちは〈子どもの庭〉についてその空間的側面からの考察、それが、子どもに対して世界の基本構造=神性を予感させ、〈生の合一〉へと向わしめる意味ある縮図化された宇宙であることを見た。それはまた失われた楽園の回復をも意味するものであった。しかし、このような理解は未だ一面にすぎず、おとなとの連関を捨象したものにすぎない。次章において〈子どもの庭〉がどのように、おとなと子どもとの相互活性化の場たりえるのか、〈子ども祭〉を中心に考察することにしよう。

IV 〈祝祭空間〉としての〈子どもの庭〉

フレーベルの教育思想の中でこれまで十分に位置づけられなかったのは子どもの祝祭⁴¹⁾であろう。これまでこの祝祭についての研究は十分に〈子どもの庭〉との思想的関連を取り扱ってこなかったため、祝祭が地上楽園回復の〈子どもの庭〉の実践の延長上に企てられた、社会革新=生の更新を旨とするものとしては理解されてはこなかったといつてよい。

1850年フレーベルは、近隣の〈子どもの庭〉と合同で〈子ども祭〉を開催する。広場に大きな円が描かれ、その円の外部に村民や父母たちが見守っている。その円の中で子どもたちは様々な遊戯を披露する。しかもその遊びはいずれも輪を基調とするものである。フレーベル自身は、このような子どもたちを円にならべることについて独自の意味づけをしている。すこし長くなるが、フレーベルの思考の特徴をよく示しているので引用しておこう。

「その理念(個人の完全な自己活動と自己選択と自己決定のもとで個人と全体を満足させるための全面的かつ全体的な生命統一の理念——筆者)の表現と具体的例証は、遊戯する子どもたちが遊戯の輪のなかへ入ると同時に始まった。

しばしば述べたように、この瞬間まで、集団全体はただ外面的な目印によってのみ分けら

れたものにすぎなかったが、それ自体は理念や思想によって統一されたものであった。参加者の一人一人は、今までは全体を見わたすこともできなかつたし、大きな全体のなかでの自分の立場や位置や場所を認識してもいなければ占めてもいかなかった。それゆえに遊戯祭を行なう参加者全体がグループごとに円のなかに入ってくるや、彼らは境界線をなすその円のすぐ内側で、全体を構成する一人一人の子どもが二人の遊戯仲間と手を取り合い、全員がその顔を円の中心に向けるように整列させられた。こうして一人一人が全体を見わたし、全体のなかでの自分の位置やそれぞれの個人に対する自分の位置を理解したのである。このようにして最も有効的で最も深い生命直観が参加者一人一人のものにならざるを得なかつた。すなわち①外には見えないが、全体を規定している統一、ここでは眼には見えないが円を規定している中心を直観する。②全体を直観すると同時に、一人一人にいたるまでの全体のすべての構成員を直観する。③円のなかでの彼の立場や位置によって、彼と円のなかでの各個人ならびに円の中心との関係によって、したがって、彼に対してなされるべき、かつ彼によって実現されるべき諸要求との関係において、彼自身を認識し直観する。

統一は中心点に似ており、多様性はすべての構成員のうちに表現され、個別性は遊戯者一人一人のうちに表現される。このようにして新たに三つの直観がこの遊戯表現によって可能となった。すなわち①眼には見えないが内面的には最も深い統一性の直観。②眼に見える多様性・外面性の直観。③個別性・特殊性・個性の直観。……」⁴²⁾

ここでフレーベルはその教育思想の中核を語っているといつてよい。教育の目標は〈生の合一〉であり、それは、統一化、多様化、個別化を通して達成されねばならない。その手段として、輪になることを利用するのである。そこには恩物を支えるものと同じ論理が働いている。輪を作ることによって切り取られ、顕在化した円環空間が生み出される。円環という完結した空間は、その空間を生み出した子どもたちにとって宇宙の祖型を提示している。宇宙は子どもたちが手を結ぶことによって生み出されたが故に、子どもは全体と一部という基本的関係を予感しえる。それは言いかえれば、円周の一点に内側に向かいあって立つことによって生じる相互主観性の獲得の劇でもある。——他者の位置を通して自己の位置を知り、多数の円周上にならぶ人間の一人として自己を把握する。

円環は統一性、全体性、完全性、無限性⁴³⁾といった象徴として古代より理解されてきたが、フレーベルはその伝統にのりながら、子どもが自ら輪を作り、円周上に立つことによって生ずる経験の意味内容を独自の人間学によって解釈しているといえる。『アルテンシュタインにおける遊戯祭』の中では、先の引用文につづいて、様々な円を中心とする遊びがくりひろげられているが、それに対する解釈は上述のものにつぎるといえる。

〈子ども祭〉の子ども側の問題を取り上げたがこれは祭のもつ意味の一面を述べたにすぎない。重要なことは、この子どもたちを取り巻いて、子どもたちの外側にあるより大きな

円周上に位置してこの遊戯を見ているおとなにとっての〈子ども祭〉の意味なのである。ここでは、子どもの輪が幾重にも重なりあい、その外側でそれを見ているおとなたちの輪が取り囲むことになる。輪になることによって生み出された空間は、その中心に子ども、周縁におとなが位置することになる。この閉じられた空間は世俗的空間の価値の配置と逆転し、内部の子どもが神性を顕現するものとして、周縁のおとなよりも高い価値が付与されることになる。輪の内部の子どもの遊戯は、世俗的な対立、葛藤を超越した、調和と和解の空間を構成しており、それはすべてが原罪以前の始原の状態、失われたエデンの庭を示している。周縁のおとなは、幾重にも重なる子どもの輪が円舞として旋回していくとき、その輪の一員として、生の始原の時間へとつれ戻されるのである⁴⁴⁾。このように〈願望時間〉としての子どもへとつれ戻されるとき、おとなは（あるいは共同体）は己の生を更新し、若がり、理想を地上にもたらず〈人間の使命〉の遂行へとかりたてられるのである。このようにフレーベルは子どもを媒介にして日常空間の内に、〈祝祭空間〉を創出し、そのことにより「世界の調和を唱える福音のもとに、各人はその隣人たちと統一され、和解し、融合したと感ずるばかりでなく、全く一体であると感ずる」⁴⁵⁾（ニーチェ）体験をおとなたちにもたらずのである。

このようなおとなたちにフレーベルのいう〈生の合一〉を体験させるという側面こそ〈子ども祭〉の意図したものであった。「本日の子ども祭は子ども時代の楽園のひとつの姿である。この楽園をすべての人々にしっかり記憶させよう。そして神の声である時代の呼びかけにしたがおう、さらにフレーベルのいうように子どもたちの真の保護者になろう。」⁴⁶⁾とミッテンドルフは言い、フレーベル自身また次のように述べている。

「……そのうえほんとうに幸福な幼児や少年の世界のほか、あらゆる階層の教養があり人間の心情をもった人びとがきわめて積極的に喜んで参加してくれている。王侯と民衆さえ内面的に一つに結ばれている。そのような結びつきがどうして最も完全な生命統一の感情を呼び起こさないことがあるだろうか。そしてそれはすでに幼児と少年の素朴な遊戯祭の成果であり、それはまず第一に、教育的な陶治的な形成的な意味でそのように行なわれた民衆の祭の成果であるはずのものではなからうか。……」

まさにその遊戯祭は、自然との、人類との、いや神との合一の祭であった。それはあたかもあの農夫が『そのような一日には神の祝福がある。』といった通りであった。

だからそのような祭がより多く生活のなかに呼び出し、実現するすべてのものを、万一にもわれわれが呼び出せないことがあるだろうか。そうすることによってわれわれすべての心が熱望していること、つまり『全面的な生の合一』(allseitige Lebenseinigung) は究極的に達成されるのである。⁴⁷⁾

地域の内へと開かれた象徴的な〈祝祭空間〉を創出することによる、〈生の合一〉の体験を子どもとおとなの両者にもたらずことこそ〈子ども祭〉の意図するところであり、そこに

は生の革新の根拠としての〈子どもの庭〉の考えが存在しているように思える。失われたエデンの庭を祖型とする〈子どもの庭〉は、それ自体子どもの教育の場であると同時におとなの自己の神性をめざめさせ〈生の合一〉という〈人間の使命〉の遂行へと向かわしめようとする場であった。〈子ども祭〉はその空間的に拡張されたものとして、単に子どもをもつ親のみならず様々な階級の人々を包摂して、始原の状態につれもどし、活性化させることを目的としている。〈子どもの庭〉が単に外部の悪から子どもを庇護する保護空間ではなく、地域の生の革新の拠点であるように、〈子ども祭〉とはかわいい無垢な子どものお遊戯の発表の場ではなく、あらゆる人間を包み込み和解と調和を経験させる場、「もっとも高い歓喜の状態のなかで、日々の取引的な生活で味わう孤立から脱出し、新しい共同感の中に迎え入れられたように感じる」⁴⁸⁾(ボルノー)ようにさせる〈生の合一〉の場なのである⁴⁹⁾。

V 結語にかえて

〈聖なる空間〉としての〈子どもの庭〉は単に外部の墮落した文化から子どもを保護する閉じられた空間ではない。フレーベルは〈子どもの庭〉と共に保母養成機関を創出しており、また〈子どもの庭〉に来る子どもたちの親の組合も作っている。そのような家庭、保母養成機関、親の組合、支持者による共同体といった機関と〈子どもの庭〉は結びつけられている。子どもを通しておとなの〈人間の使命〉を自覚させ遂行を促し、そのようなおとなたちの共同化と子どもの教育を通して、世界の更新、地上の楽園化を図ることがフレーベルの目的であったとき、〈子どもの庭〉と他の機関との結合は当然の帰結であった。〈子ども祭〉はこのようなフレーベルの思想的表現、一大スペクタクルであった。フレーベルは子どもを中心とする輪を作ることによってエデンの庭をおとなたちの眼前に提示したのである。個が集団の一部として支え、集団は個を支え、両者は一者となる。〈生の合一〉という理念が単なる形而上学的な題目ではなく一つの経験であることを明らかにしたのである。このような子どもを媒介とする〈聖なる時間〉、〈聖なる空間〉の創出こそ、日常的時間、日常的空間、そして世俗的価値を無化するものであった。

〈子ども祭〉の翌年1851年〈子どもの庭〉はプロイセン権力によって突如禁止されることになる。この「幼稚園禁止令」についてはこれまで様々な研究が明らかにしてきたように⁵⁰⁾、フレーベルの思想や交際した人物、組織の中にその理由が見い出されるのはまちがいないにしても、そのことと並んでこのような〈聖なる空間〉としての〈子どもの庭〉の在り方自体にプロイセン権力と向かい合う急進性が存在していたことによるものではなからうか。

禁止令の後、フレーベルの〈子どもの庭〉は非聖化されていく。それを支えていた、墮落した社会を告発しあるべき社会を透視する緊張した〈願望時間〉としての子どもという思想

は、いわゆるノスタルジックで感傷的なものへと変貌していく。子どもはおとなを覚醒へと導くかわりに慰謝するものとなる。社会との緊張関係を失って〈子どもの庭〉はよるべなき子どものための保護された花園へと転化することになる（ここでは子どもはもはや世界の悪から隔離され保護されねばならないひ弱い花となる）。子どもの様々の現象を読解する解釈体系が単に象徴主義的感傷的なものとなり、社会的革新との連関を見る目を失うとき、フレーベル幼児教育理論は、恩物を中心とする教育方法へ形式化されていく。そして子どもの実状と乖離した方法の形式的機械的運用は、次の世代によって批判され克服されるべき対象となっていくのである。

〔註〕

- 1) 明治9年、桑田親五によって「^{きょうねん}幼稚園」という訳語が充てられて以来、通常は「幼稚園」と訳されてきた。しかし今日この言葉で呼ばれている教育機関は、必ずしもフレーベルの思想を忠実に反映しているものではない。フレーベルの Kindergarten の思想を考察する本論文では、より中性的な意味で直訳的な〈子どもの庭〉という言葉を使用することにする。
- 2) フレーベルの子ども理論解釈については拙論「フレーベル教育論における〈子ども〉の意味——〈願望時間〉としての〈子ども〉——」（大阪大学人間科学部紀要，第11号，1985）を参照，本研究はこのフレーベル解釈に基づいている。
- 3) F. Fröbel; *Ausgewählte Schriften*, Hrsg. v. E. Hoffmann, Bd. 2, *Die Menschenerziehung*, 1951. (以下 A. S. Bd. 2 と略す) s. 7. 邦訳、『人間の教育』荒井武訳，岩波文庫，上，p. 11.
- 4) 拙論文 pp. 23-25. 参照。
- 5) 拙論文 pp. 25-29. 参照。
- 6) F. Fröbel; *Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften*, Hrsg. v. Dr. W. Lange, 1966 (Neudruck der Ausgabe 1862 und 1874). (以下 G.P. S. と略す) Apt. 1, Bd. 2, s. 517. 小原國芳，荘司雅子監修，『フレーベル全集』玉川大学出版部，1981，第3巻，p. 553.
- 7) F. Fröbel; A. S. Bd. 2, s. 4. 表題の口絵の下の文章。
- 8) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, s. 539. 邦訳，第3巻，p. 593.
- 9) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, s. 503. 邦訳，第3巻，pp. 528-529.
- 10) 月尾嘉男，北原理雄『実現されたユートピア』鹿島出版会。
- 11) 増田義郎『新世界のユートピア』研究社。
- 12) M. エリアーデ『エリアーデ著作集』前田耕作訳，第8巻，せりか書房，p. 160.
- 13) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, s. 549. 邦訳，第3巻，p. 611.
- 14) E. シュプランガー『フレーベルの思想界より』小笠原道雄，鳥光美緒子訳，玉川大学出版部，p. 74.
- 15) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, s. 561. 邦訳，第3巻，p. 630.
- 16) フレーベルのアメリカ移住への思いはまったく消え去ってしまったわけではない。1844年にフレーベルはドイツ系のアメリカ人とハイデルベルグで出会った後，アメリカ移住への関心が強められたという (M. S. Shapiro; *Child's Garden—The Kindergarten Movement from Froebel to Dewey*, 1983, p. 27.)。またプロイセンによって〈子どもの庭〉が禁止されたとき，彼は「もし私の祖国で私の運動が認められず支持されないのであれば，私はアメリカへ行くつもりである。そこでは新しい生活が展開されつつあり，またそれに応じた新しい人間の教育も足場を見いだすだろう」と手紙に書いている (同上書，p. 27.)。

- 17) J. Prüfer; Friedrich Fröbel—Sein Leben und Schaffen, 1927, s. 92.『フレーベル全集』の編者 W. ランゲによっても命名の場面が記述されているが、花園の景色の話は出ていない。(G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, s. 13. 邦訳, 第1巻, p. 32f.)
- 18) このようなアナロジーはすでにルソーに見ることができる。ルソーは『エミール』の冒頭の部分で子どもを若木に、そして教育者を園丁に比較している(『ルソー全集』, 樋口謙一訳, 白水社, 第6巻, pp. 17-18)。
- 19) フレーベル自身の言葉としては、たとえば F. Fröbel; *Ausgewählte Schriften*, Hrsg. v. E. Hoffmann, Bd. 1, *Kleine Schriften und Briefe von 1809-1851*, 1951. (以下 A. S. Bd. 1. と略す) s. 118.
- 20) 川崎寿彦 『庭のイングランド——風景の記号学と英国近代史』 名古屋大学出版会。
- 21) F. Fröbel; *Friedrich Fröbel an Gräfin Therese Brunszwick*, Hrsg. v. E. Hoffmann, 1944, s. 157f.
- 22) 拙論文, pp. 29-32. 参照。
- 23) 〈予感〉については、浜田栄夫「フレーベルの教育思想と予感」(教育学研究, 第46巻, 1号) O. F. ボルノー『哲学的教育学入門』浜田正秀訳, 玉川大学出版部, pp. 44-50. 参照。
- 24) F. Fröbel; A. S. Bd. 1, s. 106.
- 25) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 2, s. 462. 邦訳, 第5巻, pp. 108-109.
- 26) F. Fröbel; *Friedrich Fröbels Mutter und Koselider*, Hrsg. v. J. Prüfer, 1927. (以下 M. K. と略す) s. 72. 邦訳, 第5巻, p. 168.
- 27) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 2, s. 25. 邦訳, 第4巻, p. 58.
- 28) F. Fröbel; M. K. s. 72. 邦訳, 第5巻, p. 178.
- 29) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 2, s. 271. 邦訳, 第4巻, p. 544.
- 30) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 2, s. 275. 邦訳, 第4巻, p. 550.
- 31) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 1, Bd. 2, s. 377. 邦訳, 第3巻, p. 325.
- 32) 久野昭 『魔術的観念論の研究』 理想社, p. 195.
- 33) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, s. 39f. 邦訳, 第1巻, pp. 70-72.
- 34) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, s. 40. 邦訳, 第1巻, p. 72.
- 35) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 2, s. 272. 邦訳, 第4巻, p. 545.
- 36) E. Hoffmann; *Friedrich Fröbel und Karl Hagen*, 1948, s. 27. 山口一雄「フレーベルの Kindergarten 共同体について(1)」(近代幼児教育史研究会, 第2号, 1977) p. 5. より重引。
- 37) フレーベルの共同体論については、岩崎次男「Fröbel をめぐる教育と政治の問題」(教育史学紀要Ⅲ, 1960), また上記の山口一雄の論文を参照。
- 38) F. Fröbel; M. K. s. 43. 邦訳, 第5巻, p. 189. 絵はフリードリヒ・ウンゲル (Friedrich Unger) によるもの。ウンゲルについてはブリュフアーの解説を参照。
- 39) F. Fröbel; M. K. s. 42. 邦訳, 第5巻, p. 182.
- 40) B. F. v. マーレンホルツ—ビューロー 『教育の原点——回想のフレーベル——』伊藤忠好訳, 黎明書房, p. 135.
- 41) フレーベルはしばしば祝祭について言及している。たとえば『カイルハウ学園のクリスマス祭の催し』『少年の春の遊戯および教会のお祭り, 幼児のお祭り』『1840年6月28日——ブランケンブルグとカイルハウの幼児と青少年のための学園における四重の祝祭日』『アルテンシュタインにおける遊戯祭』。祝祭についてのフレーベルの思想としては次の文章が理解を助けてくれるだろう。祝祭は「平和で喜ばしい, 生を目ざます気分」に特徴づけられており, 「この気分はこの祝祭の時期に, 心地よい春風のように, また光り輝く暖かい春の太陽の光のように, すべての祝祭する者を, 否, キリスト教徒を越えてさえも浸透し, 活気づけるのである。このことは理想的なものや生の統一の中で近づけられ, 啓示される 神的なものの働きであって, 特に, 理想的なものや, 神的なものに対して等しく敏感な子どもの心情や幼な子のような人間の心情への働きであるし, 更に, 純粋な幼な子のごとき, 真に人間的で, 神的なものに対して敏感な感情や気分にある時の人間への働きなのである。」(G. P. S. Abt. 1, Bd. 1, s. 397. 邦訳, 第3巻, p. 63.)。しかし「祝祭」は喜ばしき気分の場合に限って使用されているのではない。フレーベルは友人の追悼文『ヴィルヘルム・カルルの死に捧ぐ』においても, 死によっ

て残された自分達が死者(カルル)を通して天国と結びつくことを祝祭という言葉で捉えている。このことからフレーベルが祝祭というとき、日常的に閉塞した人間が超越的なものへと開かれること、〈生の合一〉を意味しているといえる。

- 42) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 2, s. 531. 邦訳, 第5巻, pp.218-219.
- 43) G. プーレ 『円環の変貌』 岡三郎訳, 上巻, 国文社。
- 44) ルソーは広場の中心に花で飾った一本の杭を立て, そこに祝祭空間を生み出すことによって, 民衆の分断され石化した生を活性化させよりすぐれた共同性を獲得させようとしたが, フレーベルは杭の代わりに〈聖なる子ども〉を中心に据えることによって同様の空間を現実創造したといつてよい。ルソーの祝祭については, 松本勤「ルソーあるいは直接的コミュニケーション」(『講座コミュニケーション』 研究社, 第1巻所収) 参照。
- 45) F. ニーチェ 『悲劇の誕生』 秋山英夫訳, 岩波文庫, p. 35.
- 46) B. F. v. マーレンホルツビューロー 前掲書, p.136.
- 47) F. Fröbel; G. P. S. Abt. 2, s. 558. 邦訳, 第5巻, p. 272.
- 48) O. F. ボルノー 『教育を支えるもの』 森昭, 岡田渥美訳, 黎明書房, p.187.
- 49) 以上見てきたような子ども一おとなの相互活性化を通して社会を革新していく場としての〈子どもの庭〉の考え方は, 当時の教育思想, とりわけ教育をユートピア建設への手段として見る教育思想と対照するとき, その特徴が際立つように思える。たとえばフレーベルと同時代, イギリスにおいてユートピア建設のために幼児施設を設立させたロバート・オーエンは次のように述べている。「子供は例外なく受動的で, また驚くべき巧妙な複合体である。だからそれは, この問題についての正しい知識にもとづいた的確な注意を前後にはらうならば, どんな人間性でも集成的にもつように形成することができる。この複合体は, 自然の他のすべての被造物と同じように, 無限の多様性をもっているとはいえ, なお変形自在の性質をもっているから, 賢明な管理のもとに根気よくやれば, 遂には合理的な願望の像そのものに形づることができる。」(『新社会観』 岩波文庫 p.40)。子どもの〈可変性〉への着目を基に, 子どもを新しい世界の住人へと教育されるべき対象と考えている。子どもはユートピア建設との関係で価値が付与されている。そこにはオーエンの当時のおとな文化に対する批判と子どもの〈可変性〉に対する信条を見ることができる。フレーベルはその思想の中核的な部分をフィヒテに負っているのであるが, そのフィヒテは『ドイツ国民に告ぐ』の中で次のように言っている。「われわれと接触して生活する限り, 子どもは墮落せざるを得ません。これは避けられないことであります。われわれが彼らに対して一片の愛情でももちあわせているなら, われわれは, 毒気に満ちた, このわれわれの社会環境から子どもたちを隔離して, 彼らのためにけがれのない場所を用意してやりねばなりません。」(『ドイツ国民教育論』 明治図書 p.130) ここにおとなと子どもとの相互交渉を通して相互に活性化される(自己の神性を認識し実現していく)というダイナミズムはない。ユートピア建設は, 正しく教育された子どもによってしか期待しえない。学校はそのようなユートピアの住人たる子どもの教育の場として, それ自体ユートピアの祖型とならねばならない。それゆえ学校という空間は, 墮落したおとなの世界に対して閉じられたものでなければならず, 子どもは隔離されねばならない。「いやくも人類の全面的な改造をはかろうとするならば, まず人類をそれ以前の時代から完全に切り離し, 将来の生活を過去の生活から断絶させることが, 必要であります。」(『ドイツ国民教育論』 明治図書 p.110) このようなユートピア建設に向けての戦略とフレーベルのそれとの差異は, ユートピアそのものの把握の仕方から由来するものである。フレーベルにおいて天国の地上における実現は, おとなと子どもとの共同体によってなされるのであるが, ある意味ではその共同体そのものが実現されたユートピアなのである。このことを考えるとき, 私たちはフレーベルの時間についての考え方に着目する必要がある。フレーベルにおいて時間は終局をもつものでなく, 螺旋線的にどこまでも上向する時間である。それぞれの段階はそれ特有の性格を有しており課題を有しており, そのような課題をとげることが次の段階を形づくるものであるが, その段階の先に固定した終局の段階は存在しない。このことは人間の個体としての発展においても, 種としての発展においても貫徹されている。フレーベルの場合もヘーゲルと同様に時間を精神の展開として捉えているのだが, ヘーゲルと異なり終局の目的(すなわちすべての葛藤-矛盾の終結)はありえず, あるのは二者の分割をたえず調和へと導く無限の努力の過程である。〈生の合一〉への努力こ

そが〈人間の使命〉であるとき、人間の個としての課題も完結することはなく、しかしながらそれぞれの時間の中でたえず実現されるものだといえるのである。神の国の実現は、日々の子どもの生活の内に入り、それ自体が理想的時間なのである。そしてその現在の神性の実現が、未来の神性の実現を基礎づけるのであるが、その未来は開けているから現在は未来に従属することなく価値化される。つまり時間は、〈生の合一〉化過程そのものとして手段としてと同時に目的として評価される。

- 50) いわゆるプロイセンの「幼稚園禁令」に関する実証的研究については、岩崎次男「プロイセンの幼稚園禁令に関する考察」(埼玉大学紀要, 教育学部(教育科学), 第26巻, 1977) 参照。

A STUDY ON F. FRÖBEL'S THOUGHT OF THE MEANING OF CHILDREN FOR MEN II

Satoji YANO

In my previous study, "A study on F. Fröbel's thought of the meaning of children", I have cleared that "the unifying of life", which is the expression of "the mission of men", is the central theme of Fröbel's thought, and that for men the striving for "the unifying of life" practically means to have and live with (to or for) children. This statement is founded on Fröbel's theory of children. "Children" is the most important key concept to understand his thought. I have distinguished and categorized three aspects in Fröbel's theory of children.

(1) According to Fröbel, children are by no means originally sinful. On the contrary, they are innocent and sound. They are the expression of the divine law. So men can find their lives distorted and injured by contrasting their own lives with those pure lives of children. Thus men can refine and inspire their lives by living with children.

(2) Children are the successors of the continual development of mankind. In other words, they are the agents in the realization of the divine law. This realization can not be fulfilled in one generation. It must be continued endlessly by successive generations. So from the view point of this "mission of men", men should be with children and be engaged in educating them.

(3) To have children means "the unifying of life" between man and woman. To educate children promotes in men the awareness and realization of the divine law. Children being the expression of the eternal, or the divine, we can look out the paradise through children.

In short, the striving for "the unifying of life" in men ("the mission of men") means to live with (to or for) children.

On this study, I try to investigate the spatial meaning of Kindergarten by starting from the conclusion I have reached in my previous study. I argue that Kindergarten is the very space in which "the unifying of life" can be realized. We can distinguish and categorize four aspects.

(1) Kindergarten as a divine space—As has been shown in my previous study, Fröbel's central subject is to realize "the unifying of life" and "the renewing of life" (the renewing of individual man and society). Kindergarten is the base from which the new world is to be realized. So we may say that Kindergarten is an Eden restored. Kindergarten is a divine space.

(2) Kindergarten as a playing space—Based on the theory “the primary accordance of microcosmos with macrocosmos”, he stated that the body movements can symbolically express a microcosmos, and that play and the play with “Gabe” enable children to have a presentiment of the divine law. Kindergarten is a playing space.

(3) Kindergarten as a planting space—According to Fröbel, plants enable men to realize the divine law. Children can realize the life cycle of men and “the mission of men” by cultivating plants. So in Kindergarten there should be gardens of children’s own in which they can plant themselves.

(4) Kindergarten as a festive space—Kindergarten is the base for the purpose of restoring an earthly paradise. The children’s “play festival” is the remarkable expression of the purpose. In this festival children realize “the unifying of life” by circling round and round, then parents and other men around them also experience the same “unifying of life”. Both men and children will have a presentiment of the ideal life through this experience. We can see the most significant aspect of Kindergarten in “Kindergarten as a festive space”.